

## 第 V 群 座長のまとめ

東邦大 耳鼻咽喉科

臼井信郎

第 V 群はそれぞれ異なる目的で研究された 3 つの演題でいずれも耳鼻咽喉科からの出題であった。

### 14. ネブライザー濃度の経時的变化 : 大越俊夫ら (東邦大・大橋)

普段外来で使用しているネブライザーでの使用経過中における薬液濃度の変化をトブラシンを指標に測定したものであった。その結果はジェット式でも、超音波式でも薬液の濃縮が起これ、ことに薬液量が少なくなる程濃縮の程度も強くなるため、最近普及しだした大量の薬液を貯蔵するタイプの大型ネブライザーの場合には濃度過多による有害性の発現に注意を要するということがあった。なお、1 回注入式ネブライザーではこのような問題は生じないということであった。

### 15. 硫酸アストロマイシンのネブライザー療法後における組織内濃度 : 井上良江ら (独協医大・越谷)

手術適応となった鼻・副鼻腔、咽喉頭疾患患者に、あらかじめ 4 日間硫酸アストロマイシンをネブライザーにて投与し、手術中に採取した組織の組織内薬剤濃度と血中濃度をバイオアッセイ法にて測定したものであった。その結果、血中濃度は微量であったが鼻副鼻腔、扁桃、喉頭の組織内濃度は筋注投与と同等あるいはそれ以上であったといい、ネブライザー療法による硫酸アストロマイシンの有効性を述べた。

### 16. マイクロデンシトメーターによる副鼻腔陰影の客観的評価 : 間島雄一ら (三重大)

慢性副鼻腔炎に対する単純 X 線写真における副鼻腔陰影の評価をマイクロデンシトメーターにて客観的に評価できるか否かを検討したものであった。その際、副鼻腔病変に対するネブライザー療法の効果とマイクロデンシトメーターによる上顎洞黒化度の変化の関係は、同一症例の同側の眼窩平均黒化度に対する上顎洞の平均黒化度の比をコンピューターで算出し、これを M/O 比とし、週 2 回、平均治療期間 84 日間アミノ配糖体抗生物質と副腎皮質ホルモン剤をジェットネブライザーにより投与し、その前後における黒化度の変化を調べた。その結果、有意に M/O 比の改善が認められたと報告した。